

## セカンドオピニオンに思うこと

独立行政法人国立病院機構村山医療センター  
齊藤正史

セカンドオピニオンとは現在の自分の病状や治療方針について他の専門医の意見をもとめることと理解されている。しかしその意義あるいは対応に関して医師と患者との間にはかなりの隔りがある。医療技術は日進月歩であり、治療法にさまざまな選択肢が存在するようになったが、一方で絶対的な治療法が確立していないことも事実である。そのためそれぞれの治療法については必ず利点と欠点があり、患者が自らの治療を受ける際に最良の治療法を選択するため主治医以外の専門医の意見を聞き参考とすることがセカンドオピニオンの目的と考えられている。ある新聞記事では地元の医師の治療方針に対して不安を持った患者が都市部の大病院の専門医にセカンドオピニオンを求めた結果地元の医師と治療方針が同じであったため安心して治療が受けられたという談話がとりあげられ、セカンドオピニオンの効用とされていた。はたしてそう単純なことであろうか。両者の意見が異なるとき患者はどう対応したら良いのであろうか。大病院の専門医の治療方針に従ってほしいと地元の医師に要請するのだろうか。あるいは転院して大病院で治療を受けることにするのだろうか。極論すればどちらの医師の治療方針が患者のために有益か患者が判断することは事実上不可能である。

医師の立場では専門医として多忙な外来中に多くの資料を持参してセカンドオピニオンを求める初診患者に当惑したことはないだろうか。短時間の間に診察と多くの資料に目を通し、治療法について適正な意見を求められる。治療法は単に資料や診察のみで決定されるものではないことは言うまでもない。また患者の治療結果に対する要求度のみならず人生観や仕事の内容、家庭などバックグラウンドまで理解しなければならない例もまれではない。治療に対する満足度調査では同じ同様の結果が得られても術前の説明によりまったく満足度がことなることが報告されている。すなわち改善したことに満足するか、残存した症候について不満をもち続けるかは術前の明にかなり依存するのである。国立病院機構で行なわれ

たアンケート調査では患者が外来中に十分な説明を受けたという実感を必ずしも持っていないことが示されている。どの程度時間をかければよいのであろうか。一方で最も多い苦情の一つである外来の待ち時間を患者サービスのため短縮に向けて努力が要求されている。大病院、専門医志向がますます高まるなか医師はますます多忙となっており、現状のままでセカンドオピニオンに積極的に取り組むことにはためらいを感じてしまうのである。

病院によってもその取り組み方はさまざまである。病院のホームページでセカンドオピニオンに取り組んでいることを公開している施設があり、その効用として患者にとって具体的な診療相談が可能となり、複数の意見を聞くことで医療の曖昧さや限界を理解する手助けとなっている。その施設で得られるセカンドオピニオンの信頼性は治療実績を根拠としている。また内容については通常と特別の二段階に差別化し、料金も異なっている。このことの是非は別としてほとんどの医師は自分でできる最良の治療法を患者にすすめる。しかしその医師にとって最良の治療法がかならずしも絶対的ではなく医師の知識や経験、外科医では手術の技量によって相違がでてくることも事実である。病院、医師の治療成績、外科医ならば手術件数、術後合併症など患者にとって知りたい情報がすべて公開されていない現状では、セカンドオピニオンの信頼性はどうなるのであろうか。まず医療機関の実績、医師の治療経験、成績について正確な情報を公表することが前提となろう。

現代のような情報社会では患者は従来の口コミ情報からマスメディア、インターネットに情報をもとめる。外来患者がインターネットで検索して病院をたずねてくることはすでに日常的になっており、医師の業績もネット上の検索で簡単に情報がえられるようになった。今はこれらの情報開示について何の責任も問われていないが、今後は情報に対する信頼性を確保する努力がインターネット管理者に要求されなければならない。

セカンドオピニオンは必要なことではあるが、なお環境がととのっていない現状では医療にもっとも重要な医師と患者の信頼関係を損なうことになりはしないかと思うのは時代遅れであろうか。